

- p.014 ※ 1 石井2017：26-47
 ※ 2 石井2019：213-229
 ※ 3 いずれもペルシア語古典詩の詩形式。それぞれ詩行内の対句の押韻、韻律の構成に特徴がある。
 ※ 4 1905-1911年にイランで起きた政治変動。イラン政治史上初の成文憲法制定と議会制度を実現して、ガージャール朝（1785-1925）が専制君主制から立憲君主制へ移行した。
 ※ 5 イランにおいて近代化・西欧化政策を強権的に推し進めたパフラヴィー朝王政を打倒し、イラン・イスラーム共和国体制を樹立するに至る一連の政治・社会的変動の総称。1979年1月の国王モハンマドレザーの国外退去（事実上の亡命）に続き、2月11日に反体制派勢力が全権を掌握し、その結果としてイスラーム的価値に則った国家体制樹立と社会再編が行われた。
 ※ 6 Sīmīn Behbahānī, 1927-2014. イランの女性現代詩人。詩人として敬愛され、さらに社会的な行動力、発信力への共感を集めて、イラン現代詩の象徴的存在となっている（鈴木2022：9-61）。
- p.015 ※ 7 イスラーム共和党（Hezb-e Jomhūrī-ye Eslāmī）は、イラン革命後ただちに、指導者ホメイニーが掲げた「ヴェラーヤテ・ファギーフ（法学者の統治）」体制を実現する目的で創設された政党。初代党首はベヘシュティー（※10参照）で、結党の中心にはラフサンジャーニー、ハーメネイー（※11参照）らが名を連ねている。
 ※ 8 ペルシア語の正式名称は Sāzmān-e mojāhedīn-e khalq-e Irān. 1965年に結成されたイスラーム社会主義的な反体制武装勢力。伝統的価値観を堅持しながら宗教の刷新を模索する中流階級知識人層を惹きつけ、イラン革命の過程で反王政闘争に重要な役割を占めた。しかし革命後はホメイニーらを「宗教的専制」と非難して決裂。1981年のイスラーム共和党本部爆破事件等、イスラーム共和国指導層を狙ったテロ行為を繰り返した。また1981年7月にパリを拠点にイラン国民抵抗評議会（Conseil national de la résistance iranienne）を立ち上げ、翌年には在外でイランを代表すると自認してイラクとの和平合意を宣言している。同評議会は1986年にフランスを追われると、サッダーム・フセイン政権下のイラクに活動拠点を移した。イラン・イラク戦争にイラク側で参戦し、イランでの支持基盤を失った。
 ※ 9 Shahriyār 1394 :155-7
 ※ 10 Mohammad Hoseyn Beheshti, 1928-81. イラン革命初期にホメイニーの側近としてヴェラーヤテ・ファギーフ体制の具現化に活躍した聖職者。イラン革命体制下の初代最高裁判所長官。1981年のイスラーム共和党本部爆破事件の犠牲となって死去。
- p.016 ※ 11 'Alī Khāmenī, 1939-. イラン北東部マシュハド出身で、イラン北

西部のゴムで神学、イスラーム法学を学ぶ。1960年代から反王政運動に身を投じ、イラン革命で中枢的役割を果たした。第3代大統領（任期1981-1989）を務め、1989年からイラン・イスラーム共和国第2代最高指導者の地位にある。

- ※ 12 鈴木 2022 : 142-143
- ※ 13 2009年6月のイラン大統領選挙で現職マフムード・アフマディーネジャードが再選を果たすも、開票直後から不正行為があったとの抗議が「緑の運動」と呼ばれる社会運動化した。政府側は不正を否定し、軍・治安当局の強権的な弾圧を前に運動は1年余で下火となったが、一時的には1978-79年の革命を想起させる勢いを呈した（山岸2018 : 6）。
- ※ 14 Sattār Khān, 1867/8-1914. カラ・ダグ地方（現在のアラスパールン）生まれ。イラン立憲革命期に発生したタブリーズ包囲戦における実質的指導者。
- p.o17 ※ 15 「モッラー」はイスラームのマドラサでイスラーム諸学を修めた聖職者・知識人の尊称。ここで言うモッラーは、ホシュゲナブで私塾を運営していたモッラー・イブラヒムで、シャフリヤールは「ヘイダルババ」全編を通じて、幼い日々の師への追想を幾度も織り込んでいる。
- ※ 16 ガージャール朝第4代国王、ナーセロッディーン・シャーの宰相であったアミレ・キャピールが、1848年に設立したポリテクニク学校で、イランで初めて軍学、工学、数学、医学など西欧の近代科学、さらに外国語、芸術などの科目を幅広く教授した高等教育機関。医学部門は1918年に分割されて、医学専門学校（のちのテヘラン大学医学部の前身）へ改組された。1920年代の学制改革で歯科医学校、音楽学校、美術学校なども独立し、ダーロルフォヌーン自体は高等学校級の地位に変わった。
- p.o18 ※ 17 バフラヴィー朝（1925-79）の第一代国王（在位1925-41）。1925年にガージャール朝を廃絶して新王朝を樹立し、国際社会でのイランの自立と近代化、世俗化を目指すが、反対者を容赦なく弾圧する強権的な独裁体制を敷いた。
- p.o19 ※ 18 Mīr Ja'far Pīshēvarī, 1892-1947. イランの政治家。現アルダビール州ハルハール出身。1905年に帝政ロシア領であったバクへ移住。同地に創設されたイラン社会民主党に加盟。1920年に同党からの発展で誕生したイラン共産党エダラトの機関紙ヒュリヤト（Hürriyyät, 自由）、ヨルダシュ（Yoldaş, 同志）の編集者、執筆者となった。ソヴィエトの支援のもと、アゼルバイジャン民主党を率いて1945年にイラン領アゼルバイジャンの広汎な自治を宣言した（アゼルバイジャン危機）。翌1946年イラン政府はソヴィエトとの共同石油会社設立合意を議会批准すると約束し、アゼル

バイジャン問題がイランの内政問題であることを認めさせ、ソヴィエト軍撤退を実現した。そして同年12月にイラン政府軍がタブリーズへ進攻し自治は終焉を迎えた。

- ※ 19 1945年に第二次大戦中からのソヴィエト軍事占領下のイランで、アゼルバイジャン民主党を率いるビーシェヴァリーが「アゼルバイジャン自治政府」を宣言し、広汎な域内自治政策を標榜して、中央政府と深刻な対立関係に発展する政治事件——いわゆる「アゼルバイジャン危機」——を指す。1946年12月、最終的に中央政府が武力鎮圧に動き「自治政府」は瓦解。ビーシェヴァリーはアラス河を渡ってソヴィエトへ逃亡し、翌47年に自動車事故のために死亡（スターリンによる暗殺という説あり）。「アゼルバイジャン自治政府」の政策、活動は、(1)域内の公的行政、教育、通商におけるアゼルバイジャン語の公用化。そのための国民政府文化大臣によるアゼルバイジャン語教科書作成のための委員会設置、(2)フェダイヤーンといわれる民兵組織の編成と、それによる域内の国軍、憲兵隊の武装解除の企て、(3)「国民政府への反対分子」にあたる地主が管轄域内に所有する土地と水利権の没収、その貧農への分配など、政治、経済、文化において「人民のための域内自由と文化的自治権」を先鋭的に追求したものであった。
- ※ 20 Bulud Qaraçorlu Səhənd, 1926-78. 現在のイラン・東アーザルバーイジャン州マラーゲ生まれのアゼルバイジャン語詩人。
- p.020 ※ 21 Heydər Əliyev, 1923-2003. アゼルバイジャン共和国第3代大統領（任期1993-2003）。カスピ海のエネルギー資源開発への外資導入を促進し、当時実質的に敗北状態にあった隣国アルメニアとのカラバグ地方をめぐる領有権紛争の停戦協定を締結した。ソヴィエト解体後に長らく続いた内憂外患状態から、アゼルバイジャンの内政、経済、外交の基盤を安定化させた。
- p.021 ※ 22 Molla Pənah Vaqif, 1717-97. 現在のアゼルバイジャン北西部ガザフ県生まれの詩人。カラバグ・ハン国のイブラヒム・ハリル・ハン・ジャヴァンシールに近臣として奉職したが、1797年にガージャール朝のアーガー・モハンマド・シャーがガラバグへ侵攻した際、混乱に乗じて一時的に政権を握ったハンの甥により処刑された。
- p.022 ※ 23 イランのイスラーム太陽暦の7月。同年のメヘル10日は西暦1988年10月2日。
- p.023 ※ 24 Məmməd Rahim, 1907-1977. ソヴィエト・アゼルバイジャンの詩人、文学翻訳者。バクー出身。
- ※ 25 Süleyman Rüstəm, 1906-1989. ソヴィエト・アゼルバイジャンの詩人、劇作家。アプシェロン県ノヴハナ出身。外国語文学のアゼルバイジャン語への翻訳にも取り組み、トルコの国民的詩人ナーズ

ム・ヒクメットの詩篇の翻訳も手掛けている。三度にわたるレーニン賞のほか、スターリン賞、労働英雄等の受賞も多数ある。

- ※ 26 公開講演会「トルコ文学越境」。2015年6月、早稲田大学を会場に中東現代文学研究会が主催（中東現代文学研究会編2017参照）。
- p.028 ※ 27 Shahriyār 1377:771
- p.029 ※ 28 中村 2019 : 21-35
- p.030 ※ 29 Karīm Mashrūtehchī（アゼルバイジャン語表記はKərim Məşrutəçi）1928-。詩人としての雅号ソンマズ（Sönməz 消えない、絶えることのない、という意味）はアゼルバイジャン語。タブリーズ生まれのアゼルバイジャン語詩人。
- ※ 30 SĀVĀKは国家情報保安機関を意味するペルシア語Sāzmān-e ettelā'āt va amniyat-e keshvarの略称。1957年に米国CIAの支援によって結成され、秘密警察と諜報機関の機能を持っていた。反国王勢力の摘発と弾圧に重要な役割を果たし、国民の恐怖と憎悪の的となった。イラン革命とともに1979年2月に解体され、初代長官のバフティヤールを除く歴代長官と、残忍で猟奇的な拷問の実行者として知られた尋問官たちの多くが処刑された（バフティヤールは、1970年に逃亡先のイラクで暗殺された）。テヘランでサーヴァークが実際に運営した拘置所は現在、「イラン訓育博物館（Muze-ye 'eburat-e Īran）」の名で公開されており、当時の状況が蠟人形や写真資料で再現展示されている。
- p.031 ※ 31 トルコ、アゼルバイジャンに普及する、洋ナシ型の胴体と細長い棹でできた撥弦楽器の総称。胴体の形状、大きさ、弦の本数などによってさらに細かく名称がわかれている。
- p.032 ※ 32 Shahriyār 1394 :112-3
- ※ 33 「(1978年11月23日時点で) それでも敢えてイラン行きを決めたのは、自分に巡って来た現地体験の数少ない機会と考えたことはいうまでもないが、それ以上に、現地に詳しい方々やイラン・ウォッチャーとして然るべき経験を積んでおられる専門家諸氏に伺ったところ、口を揃えて「大丈夫、体制の崩壊などということはありません」との心強いお言葉をいただいたからに他ならない。もっとも、この時点でイランにおいて「革命」が勃発することを、その大まかな方向性まで含めて予測した人物は、「はじめに」でも述べたように、私の知る限りカリフォルニア大学のハーメド・アルガル教授以外にはほとんどいなかったようだ。（中略）ともかくも、最近ではロシア研究者、ソヴェト研究者の大半がソ連邦の崩壊を予測できなかったように、「現在」の展開の方向を的確に判断することが至難の業であることは言わずもがなのことなのかもしれない。このこと以上に私にとっては、このイラン革命の勃発によって、日本におけるイラン研究、あるいは

中東・イスラム研究の底の浅さを痛感させられたことの方がはるかに深刻であった。事象の発生を予測し得なかったことはともかく、実際に生じた事象をきちんと説明できないことのもどかしさは如何ともなし難いものであった。」(八尾師 1988:253-4)

p.034 ※ 34 Shahriyār 1394 :172-3

※ 35 Shahriyār 1377:883

p.035 ※ 36 Shahriyār 1377:877-8

※ 37 Balay 1997

p.036 ※ 38 たとえばソヴィエト・アゼルバイジャンを代表する詩人サマド・ヴルグンは随想「英雄たちに万歳(Qəhrəmanlara Eşq Olsun)」(1949年)で次のように書いている。「霜が道を阻み、雪が降っていた。路地の石畳、大通りのアスファルトのうえで、虐殺者たちはアザルバイジャンの勇敢な息子らの骸をひきずっていた。/人はこの血塗られた恐ろしい場面を眼にしたなら、心は平静を失い、私たちが身をもって知るだけの慄きと動揺も空疎になる。この血塗られた悲劇の情景は、私たちに野蛮な中世のことを、また遂には、人のあらゆる情を封じたドイツ・ファシズムが人々を生きながら火炎に投じたことを、思い出させずにはおかない。世界の読者のうえに描き出されるありのままの現実、中世のことでもなく、力強いソヴィエト人民の勇氣に敗退し、完膚なきまでに壊滅したドイツ・ファシズムでもない。イランの今にこそ眼を凝らすべきだ。/尊い血をもってタブリズの石畳の路を、広場を、イラン・アザルバイジャンの大地を、そしてイラン中を浸す絞首台の下に堂々と立つ英雄たちは誰か？ 彼らはいかばかりの意思をもって、老いも若きもその命を犠牲に差し出すのか？」(Vurgun 2005)

p.038 ※ 39 クルアーン「ター・ハー」章85節以後に登場し、ムーサー(モーセ)の民を迷わせ「金の仔牛」を造ったとされるサーミリー(アラビア語al-sāmīrī)のペルシア語読み。

※ 40 Shahriyār 1377:886

※ 41 Rūhollāh Mūsavī Khomeynī, 1902-1989. イラン中部のホメイニ(現在のマルケズ州)生まれ。イラン革命の中心的指導者。イラン・イスラーム共和国成立後、自らの「法学者の統治」の理論を国家体制の基本原則として憲法に盛り込み、憲法に定める最高指導者(ラフバル)となった。

※ 42 'Alī Akbar Hāshemī Rafsanjāni, 1934-2017. イラン南部ケルマーン州ラフサンジャン市近郊生まれのウラマー。第4代大統領として2期にわたり(1989-1997)大統領を歴任するなど、ホメイニーの側近としてイラン・イスラーム共和国の指導的役割を担う。

p.041 ※ 43 廣瀬 2018.

p.046 ※ 44 Shahriyār 1377:1226-8

p.047 ※ 45 研究会当日、藤元優子先生からご質問をいただいた件に筆者がきちんと答えられなかった事項を以下に補足したい。

①本作の作詩年代がいつか？ シャフリヤール詩集に、個々の作詩年の記載が少なく、また伝記情報が十分でないことから、正確な作詩年は同定できていない。しかしMəmməd Rəhmanifərによれば、本作の着想はアゼルバイジャン自治政府が成立したイラン歴1324年（1945-46）に、当時在住したテヘランで、同郷の友人が「ベルシア人」との間の口論から暴力沙汰に巻き込まれたときに遡ると詩人自身が回想している。郷里での動きに対するテヘラン人の高圧的な反応に対して、イランにおける立憲革命の革新的な成果を護ったのは、タブリーズの小さな街区からの出発であったのに、という自尊の思いから「テヘラン」に覚えた反感が創作の動機であったという。

②詩句「愚味の曠野に迷う指導者がなにを知るやら」における「指導者」がどの指導者であるか？ ①の着想時期からの推論では、当時はパフラヴィー朝第二代のモハンマドレザー・パフラヴィーの時代であるが、この詩句は個別具体的な指導者より、「首都」としてのテヘランに対するメタファーであると解するのが妥当かもしれない。